

文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

【調査研究の評価軸及び評価指標等】

(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

①有形文化財（美術工芸品、建造物）及び伝統的建造物群に関する調査研究

評価軸：我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与しているか。	
成果	<p>美術工芸品については、京都府個人蔵の「四条河原遊楽図」の本格的調査を行い新たな知見を得た。また、呉春筆「白梅図屏風」研究において基底材に絵絹ではなく「葛」が用いられていた可能性がはじめて指摘された。更に東京文化財研究所が所蔵する黒田清輝宛書簡について、養母貞子及び洋画家山本芳翠からの書簡の翻刻を『美術研究』（東京文化財研究所刊行）に掲載することができた。</p> <p>建造物については、法隆寺古材調査によって、古代建造物の技法に関して成果をまとめるとともに、出雲市内の神社本殿の悉皆調査、岡山県矢掛町や同県津山市の伝統的建造物群の調査も行き、文化財建造物や伝統的建造物群の保存に資することができた。</p> <p>以上のことから、我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与することができた。</p>
評価軸：有形文化財の保存修復等に寄与しているか。	
成果	<p>薬師寺・仁和寺をはじめ、諸社寺の歴史資料及び書跡資料の調査研究を進め、それぞれの内容を明らかにするとともに、当麻寺や金峯山寺など緊急性の高い資料の調査にも着手し、今後の保存に関する方向性を示すことができた。</p> <p>以上のことから、有形文化財の保存修復等に寄与することができた。</p>

②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査研究

評価軸：無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与しているか。	
成果	<p>日本伝統楽器製作を中心とした文化財保存技術の調査研究を実施し、高齢化が進む技術保持者等への広範な聞き取り調査により大きな進展を得た。また、民俗技術「箕」の製作技術に関する「箕サミットー編み組み細工を語る」を開催した。国指定重要無形民俗文化財である「箕」づくりの技術を持つ3団体による実演とパネルディスカッションを行うなど、他では実施されていない機会をつくることができた。また、その成果として、報告書『箕 箕サミット2017の記録』を刊行することができた。</p> <p>以上のことから、無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与することができた。</p>

③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究

評価軸：記念物の保存・活用に寄与しているか。	
成果	<p>遺跡整備・活用研究集会を継続して実施し、29年度は「遺跡等を活かした地域づくり・観光振興」という独特なテーマで遺跡等の整備と活用の事例を検討し、新たな活用に関する方向性を議論した。また、28年度の研究集会の成果をまとめた報告書『近世城郭と近現代』を刊行し、成果の活用を促進した。</p> <p>以上のことから、記念物の保存・活用に寄与することができた。</p>
評価軸：古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与しているか。	
成果	<p>平城宮東院地区の発掘調査では、平城宮内最大規模の井戸や、全国でも初例となる井戸と一体的に利用される溝・建物で構成される水場空間の発見など、律令国家の王権中枢部解明に関する重要な知見を得ることができた。また、飛鳥地域等の発掘調査においても、山田寺を取り巻く交通網の一端を解明し、飛鳥地域の開発史について新たな知見を得ることができ、いずれも古代日本都城の解明等にかかる多大な研究成果を得ることができた。</p> <p>以上のことから、古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与することができた。</p>

評価軸：文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与しているか。	
成果	<p>文化的景観に関する研究集会を定期的で開催し、現状に関する情報を集約するとともに、今後のあり方に関して意見を交換し、研究を着実に進展させている。さらに平戸市、東近江市等で実地調査を行い、文化的景観の保護のあり方について検討を深めた。</p> <p>以上のことから、文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与することができた。</p>
評価軸：埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与しているか。	
成果	<p>古代瓦に関する研究集会においては、従来の軒瓦のみを対象とした研究ではなく瓦の製作技法そのものに注目することにより、瓦生産を総体的に検討し、8世紀における中央と地方との関係の具体相を把握することができ、古代社会研究の進化に寄与した。</p> <p>また、日本における水中遺跡保護体制の確立を目的とし、水中遺跡の保存・活用に関する取組を調査した。特に、①国内における漂流・漂着・難破等に関する文献情報の整理・分類と分析、②国内の水中遺跡の保存と活用の手法に関する調査研究（史跡鷹島神崎遺跡に関する保存と活用の調査研究、及び地方公共団体が実施する水中遺跡調査への適切な指導・助言の在り方に関する調査研究）、③海外における水中遺跡保護に関する最新情報の収集、④最終報告に向けたこれまでの調査研究のとりまとめの4件の課題を設定し、調査を実施した。①文化庁から各都道府県の教育委員会に対して、日本各地の市町村史などに掲載されている漂流・漂着・難破等に関する情報提供を依頼し、これを収集した。得られた6,000件を超えるデータを整理・分析し、時代や地域による海難記録のばらつきなどを調べた。②長崎県松浦市鷹島の沖で発見された鷹島2号沈没船の船首部の遺跡実測データ（琉球大学及び長崎県松浦市が作成）をもとに1/10の3Dプリンターモデル及びスチロール材を使用した展示可能な原寸大ジオラマを作成した。また、地方自治体及び文化庁からの要請を受け、福岡県新宮町、福岡県宗像市、鹿児島県徳之島(伊仙町他)、沖縄県多良間村において、水中遺跡の調査・活用に関する取り組みの支援や指導・助言を行った。③日本の水中遺跡の保護体制の骨子を作る参考とするため、諸外国における水中遺跡の調査と保護の先進的な事例の情報を集めた。特に、遺跡の現状保存の方法、水中考古学のトレーニング・教育についてまとめた。また、台湾やトルコなどこれまでの調査で焦点を当てていなかった国について、水中遺跡の保護体制など基礎的な情報を収集した。</p> <p>これまでの事業の総まとめを行ったことで、改めて日本の水中遺跡保護体制の整備を進める重要性を確認した。また、遺跡保護に関する諸問題を見出すことができた。当事業は、日本の水中遺跡保護の取り組みにおいて重要な基礎を築き、また今後の調査で活用できる実用的な資料を提供することができた。特に、諸外国の先進的な調査事例、遺跡探査手法、全国海難記録の分析結果など、水中遺跡をこれから保護・管理する各自治体が必要とする情報をまとめたことは重要な成果である。</p> <p>以上のことから、埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与することができた。</p>

モニタリング指標

		第3期中期期間平均	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
論文等数	九博	1.3	2	5			
	東文研	14.8	13	12			
	奈文研	71.4	37	61			
	計	86.2	50	73			
報告書等の 刊行数	九博	1.0	2	1			
	東文研	1.4	3	3			
	奈文研	25.2	16	17			
	計	26.6	19	21			

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

①文化財の調査手法に関する研究開発

評価軸：科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与しているか。	
成果	<p>デジタル画像の形成方法の研究開発においては、不規則な平面を有する文化財の画像情報の取得・形成やガラス乾板などの古写真の画像情報の取得を実施した。媒体が脆弱で劣化が進み資料情報の保全に緊急を要するガラス乾板からの画像取得については、東京文化財研究所所蔵資料のみならず外部機関が所蔵するガラス乾板からの画像取得を実施することができた。画像取得に当たっては、より鮮明な画像が得られるよう29年度導入した撮影機材をメーカーと共同でカスタマイズし、過去の文化財の姿を伝える貴重な画像情報の利活用の促進を実施することができた。</p> <p>埋蔵文化財の探査・計測方法においては、遺跡における地上LiDAR（レーザーによる計測）の試験的な計測と成果の精度、作業効率の評価を行う等、計測方法に関する実例研究を進め、調査手法の効率性等の向上に寄与した。また、年輪年代調査・研究では、薬師寺東塔の建造年代に関する調査で見出した木部材が、『扶桑略記』などの記述と整合的な730年に伐採されたと分かり、東塔の木部構造が藤原京の本薬師寺から移建したのではなく、平城京で新造されたものであると確定されるなどの重要な知見を得たほか、従来年代測定を目的に活用されてきた年輪年代学的手法を木簡の同一材推定に活用する等、研究手法の応用を進めた。</p> <p>以上のことから、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与することができた。</p>

②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究

評価軸：科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与しているか。	
成果	<p>歴史的建造物における加湿温風殺虫処理について、国内で初めてとなる現地処理を日光山内の社寺において実施した。その際、処理対象となる木材害虫について殺虫効果の評価試験を実施することができた。</p> <p>文化財の修復技法に関する研究においては、粘着テープや油污損の除去に用いるジェルクリーニング方法の検討を実施した。特にジェルからの作品への残留物質の有無の確認に焦点を当てて取り組んだ。</p> <p>近代文化遺産のうち鉄建造物の保存修復に関する調査研究においては、世界遺産登録や国指定等が進む一方で保存修復の理念・技術が未だ確立していない現状から、国外の先進事例を踏まえて課題を包括的に整理し、産官学の専門家と共同研究を実施することができた。</p> <p>高松塚古墳の石室解体事業について、正式報告書として「特別史跡高松塚古墳発掘調査報告」を刊行し、調査研究の質的向上に寄与した。さらにこの成果を熊本地震により被災した装飾古墳の被害状況調査に即応させ、3次元レーザー計測ならびにSfM-MVS（多視点ステレオ写真測量）による地形計測、地中レーダー探査による墳丘内の構造調査を行い、効率的に顕著な成果をあげ、被災文化財の保存・修復支援にも大きな貢献がきた。</p>

モニタリング指標

		第3期中期期間平均	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
論文等数	東文研	16.4	18	17			
	奈文研	26.2	34	51			
	計	42.6	52	68			
報告書等の 刊行数	東文研	5.0	5	5			
	奈文研	2.6	1	3			
	計	7.6	6	8			